

大音響、阪神高速が落ちた

関西国際空港へ向かう日本アジア航空222便のコックピットから見た神戸、大阪は薄雲の下にあった。

そのころ、一月十七日午前五時四十六分、神戸を南西から北東へ突き上げる衝撃が活断層に沿って走り抜けた。何度も繰り返す揺れの中で高速道路がビルが、

そして人が波打ち、きしみ、身を硬くしていた。

神戸市東灘区深江本町二、阪神高速道路神戸線北側の六階建てビル。五階の自宅寝室ベッドで目覚めていた建設業平岡満幸(吾)は、強い横揺れと音で跳び起きた。縦揺れが続く。とても立ってい

れない。タンスが飛んできた。「もうアカン。ビルが倒れる」。布団をかぶっていた妻孝子(吾)に叫んだ。

最初の揺れがおさまった。置き時計は五時四十八分。階下の孫二人が気になり、パジャマ姿、素足で屋外階段の踊り場に飛び出した。下りようとした瞬間、背後



阪神高速

神戸市東灘区深江本町、1月17日撮影
倒壊した阪神高速神戸線

で大音響が。振り向くと、信じられない光景があった。

コンクリートの高速道路が、中央線を見せるようにして横倒しになっていく。衝撃で体が浮き上がる。スローモーション映画を見ているようだ。砂じんが舞い上がり、クラクションが鳴る。ぐにやりと曲がった道路の中央分離帯に二台の車が引つ掛かっている。倒壊を免れたやや西側の高速道路では車数台のヘッドライトが光っていた。

「高速が落ちてもうた」。無我夢中で一階へ。目の前に高さ二十メートル、長さ約三十五メートル、厚さ一・八メートル、千三百トンもあるコンクリートの壁が迫っていた。それが十八プロット分、六百三十五メートルにわたって東側に続く。数台の車が高速道路に押しつぶされている。宙ぶりの乗用車から男性はい出し、傾いた道路を滑ってきた。植木の間に血だらけの男性三人がしがむ。こんなこと起きてえんやろか。小柄な体を震わせた。

東二・七キロの阪神高速・芦屋料金所の下り第一ブース。仮眠から目覚め、コーヒーを飲もうとした班長の福井幸夫(吾)は、強い力にカップを飛ばされた。同僚三人と床にはう。釣り銭が頭の上に降り注いだ。

外に出ると、他のブースの係員十四人がぼう然と立っている。約二十台の車のドライバーは身をかがめている。道路は波打ち、あちこちで陥没。「東灘区の深江